

# 教務だより

2015年6月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 大人の悪口、先生の悪口

茗溪塾塾長 宇野 雅春

この頃、ある年代に達したせいか、思い起こす光景があります。それは、私が高校二年生のときのことで、学校での地理の時間の出来事です。

六十歳を越えた女の先生が、騒ぐ生徒の前で立ち往生しているのです。授業がまったく成立しません。

先生はお茶の水女子大を卒業した才媛で、若いときはもっとさっそうとしていたのですが、何しろ身の動きもままならぬ年齢に達していて、言葉もよく聞き取れない感じでした。誰かの代理で来たのかどうかは思い出せないのですが、老眼鏡の奥から宙をにらんでいる顔が、自分も老眼鏡をかける頃になって、思い出されるのです。

年齢を経ても心がそれほど強固になるわけではありません。今思うと、どんな気持ちでいたのかなと思うのです。

私も、そのとき、先生に反発を感じていましたから、今思い返せば「行儀の良いまじめな生徒」(=私?)からも軽蔑されていたということで、一種の「いじめ」の状態ではなかったかと思うのです。一度「反発」を感じてしまうと誰も授業に見向きもしません。先生なりに工夫してみたり、ここぞと思って準備をしてくれても、授業はやはり成立しないのです。集団心理で動いているために生徒の一人ひとは気楽なのですが、先生は大きく傷ついたのでないのでしょうか。

さて、息子たちもときどき、学校の先生の悪口を言います。

それとなく話を聞いていると、やはり「授業」は成立していないようです。つい同調してしまいそうになるのですが、「待てよ！」とこの頃考えるようになりました。子どもにとって「大人の悪口」はためになるのでしょうか。親が同調すれば、子どもはますますその科目を勉強しなくなるだろうし、何より成績の悪いのをすべてその先生のせいにしてしまいます。子どもにとって良いことは何もありません。

子どもというものは純粋で優れている部分がある反面、その考え方ではどうしても一面的で利己的などころがあります。集団で地理の先生をいじめたことが、今頃後ろめたく感じられることを思うと、大人にならなければわからない「感情」というものもあるのではないのでしょうか。

民主主義が発達して、どういうわけか子どもも大人も対等な世の中になっています。

ただ、大人と子どもの間にきちんとした一線は守っていきたいと思う今日この頃なのです。

(「合格への道しるべ」所収)